

あまのこ

2015 ■ Yowamushi Pedal, Unofficial Fanbook,  
OHEYA-NO-I.N.T.R.O PRESENTS,











ちよつと  
鍛えて  
みつかア?

コン  
コン

黒田です…  
今誰も居ないッス

明日俺の  
部屋来いよ

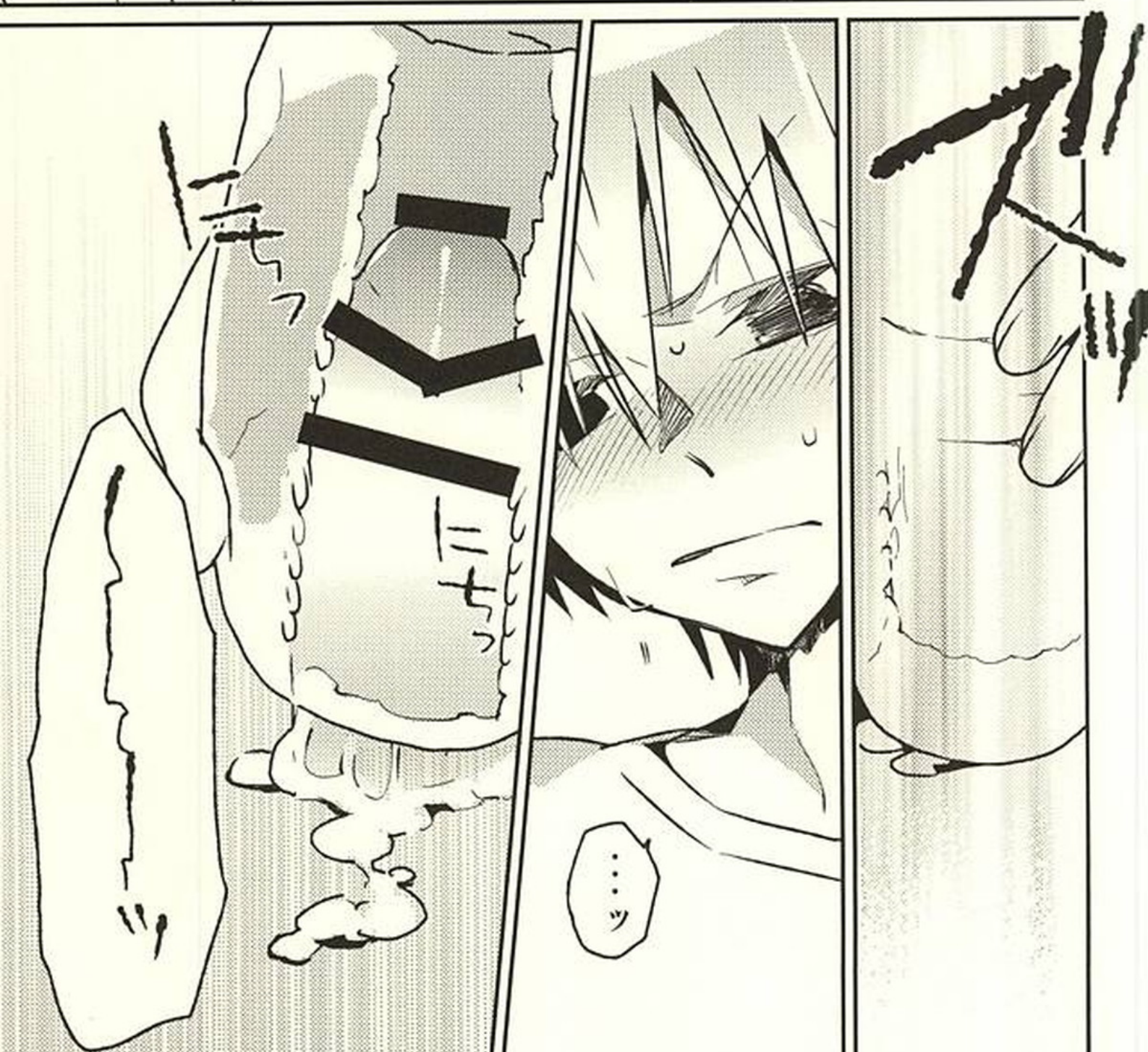
コンコン

キラッ

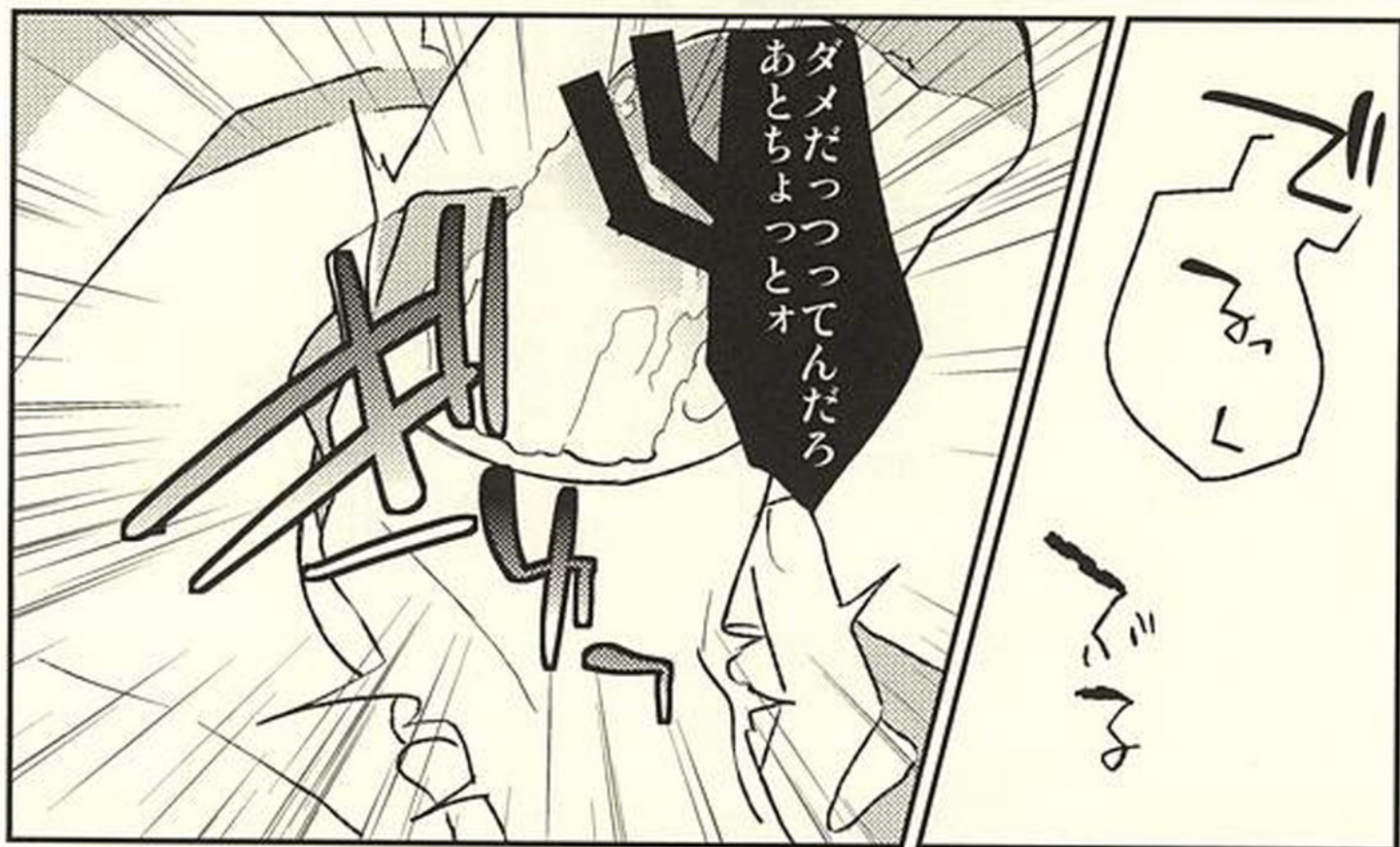
うわあ…  
ワザワザ…













あ

良いかな  
そろそろ

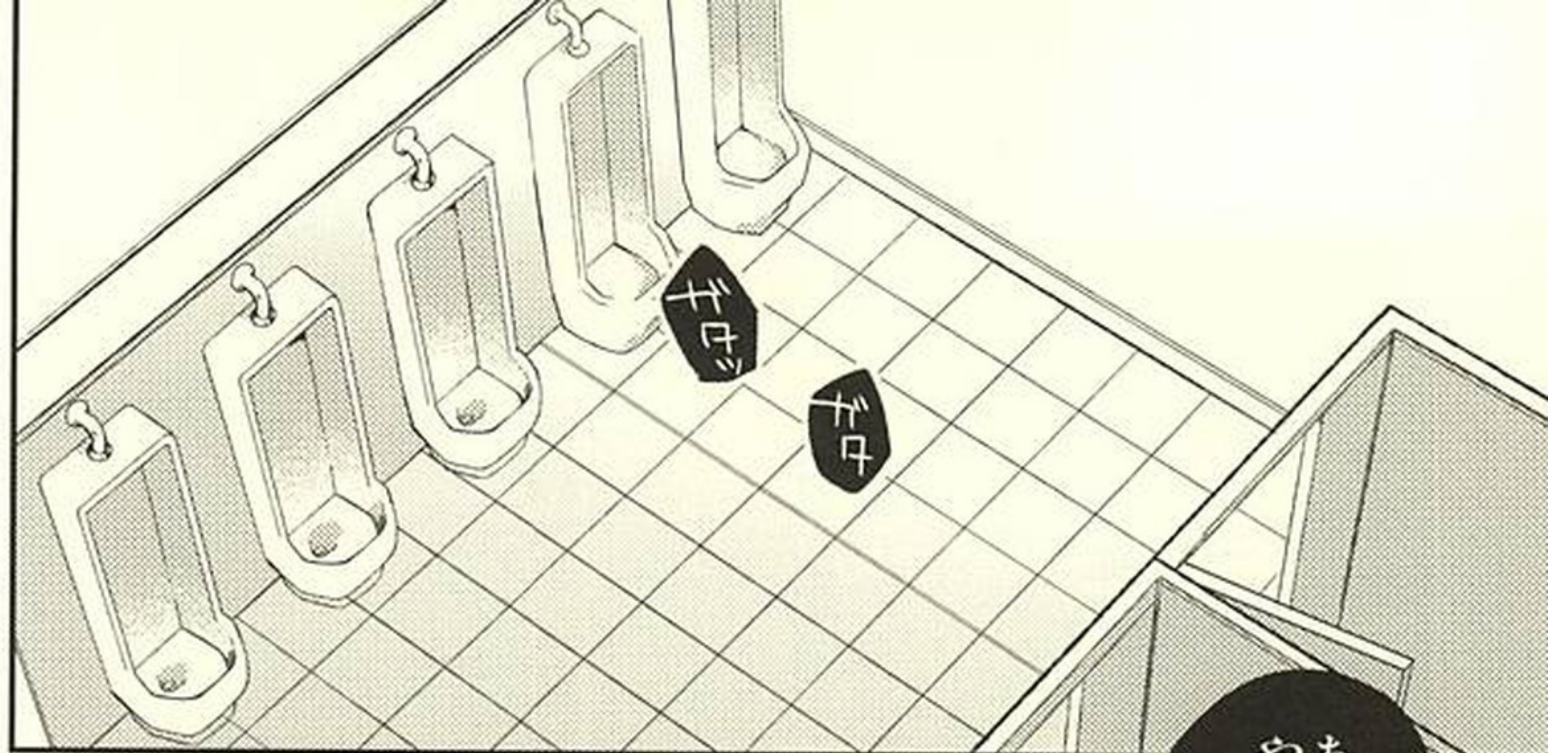
あ

ホイ黒田  
イって良いぞ

ハハハ

羽日





あの…マジで今  
やるんですか

ナナ

当たり前  
だろ















# バタンッ



何で  
残念がってんスカ



怖っえ...



バレルかと  
思った...



まあもう少ししたら  
帰っか

フ

まだ何か  
やる気ですか  
アンタ

※  
小声

カ  
馬鹿すか

七かり

るせーよ  
コレやったらな

我慢しろよ

おんた

70







がアッ

……きたさ  
抜いて……っ

くたさ……

よく出来ました

黒田ちゃん



できねえ  
つった割に

結構

我慢出来るように  
なったじゃない？

~~~~  
ツ

あんたの言う事  
全部こなせたんだ

ご褒美くらい  
ありますよねエ





ずっと勃ちっぱなしで  
挿れたらすぐとか  
ねえよな？

……まあ

誰かさんの猛特訓が  
ありましたから







?

うん

うん

うん

不夜

はあ

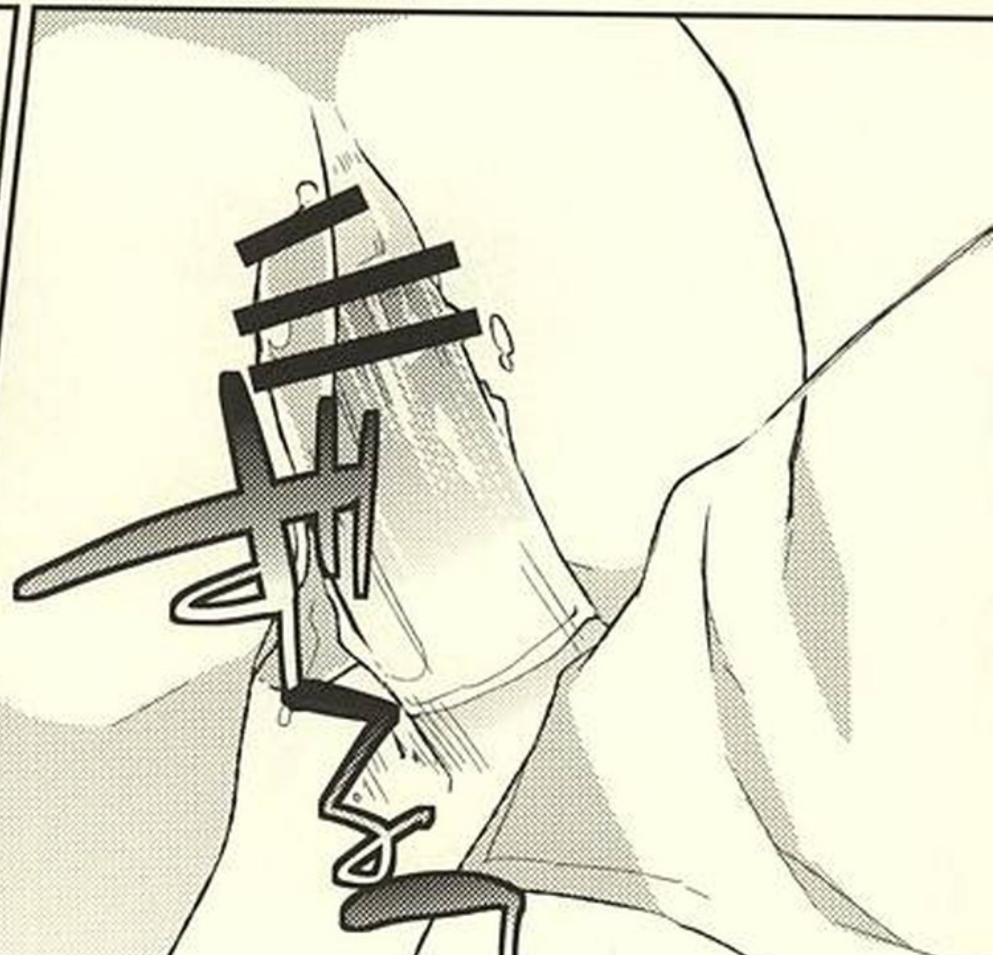
はあ



荒北さんも…最初より  
全然広がるように  
なりましたよね

**あ**  
ユルいとかじゃ  
ないですけど…っ

言うじゃねえか







ハッあ

単純に腰振ってる  
ダケの割に

口だけは  
立派ア



ハア  
つまり

こうしたら  
良いって事ですよ







荒北さんの  
気持ちいい所

俺もう全部  
知ってるんで

おっ、おっ、  
おっ、おっ



荒北さんの  
お気に  
召しましたか

さっきの



めっちや  
気分良い——

ビクビク

ヤベエ  
何だこれ

すっ……



シヤワー室で  
やんの楽だな

ツスね

ア  
キ

そうだ黒田

次は大会後に  
またやんぞ

まだやるの

えっ

そしてアリバイ  
時間差で  
帰れと言われろ  
黒田

子園甲子園









おみほい、としほくのはたあおの



「きみはいとしぼくのけだもの」きふゆ











…ハア？



黒田アお前  
うしろで  
イキそうなの？

ふっふ

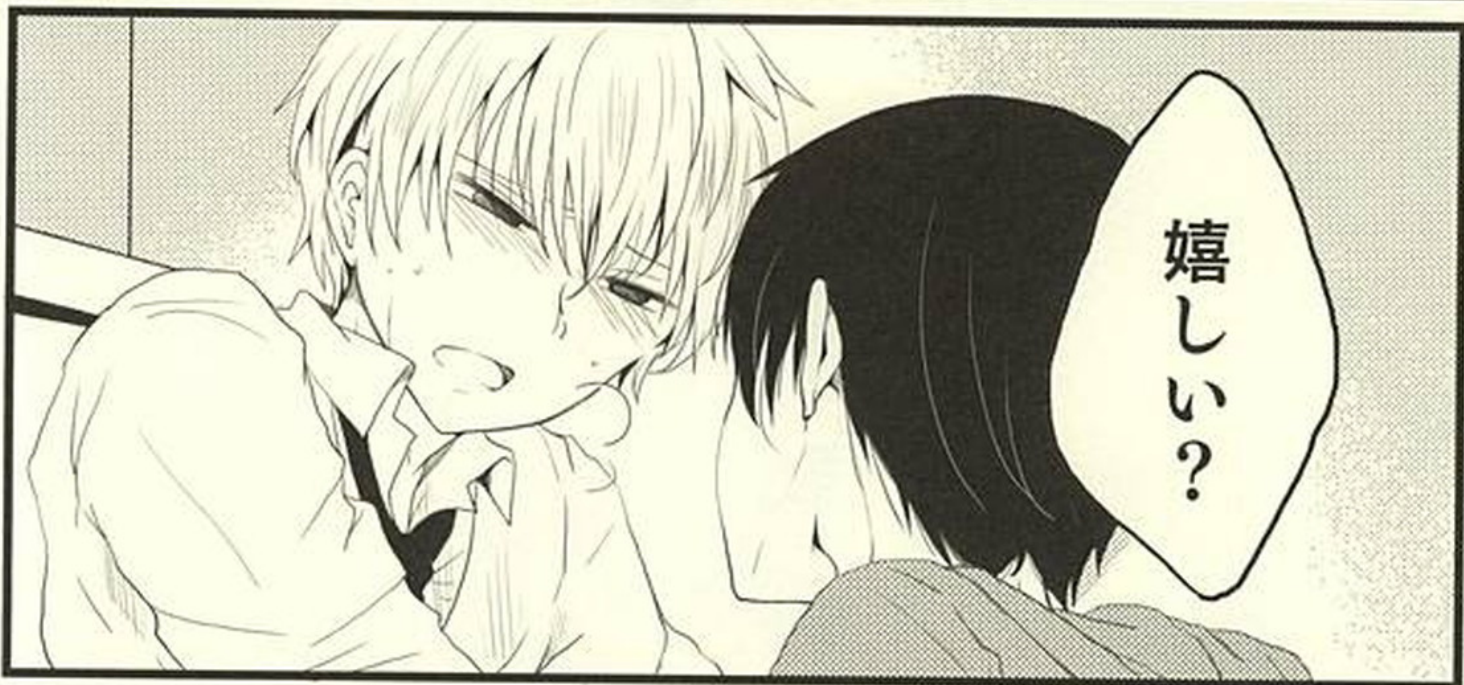


オレの事  
抱いてるクセに？





















イイコ



あまりイジメてやるなよ

黒田の事

アア?



荒北




別にイジメてねエーヨ

ワセーな


アイツが  
自分から






やめないで、  
ください


…もっと



いろいろ  
してください…

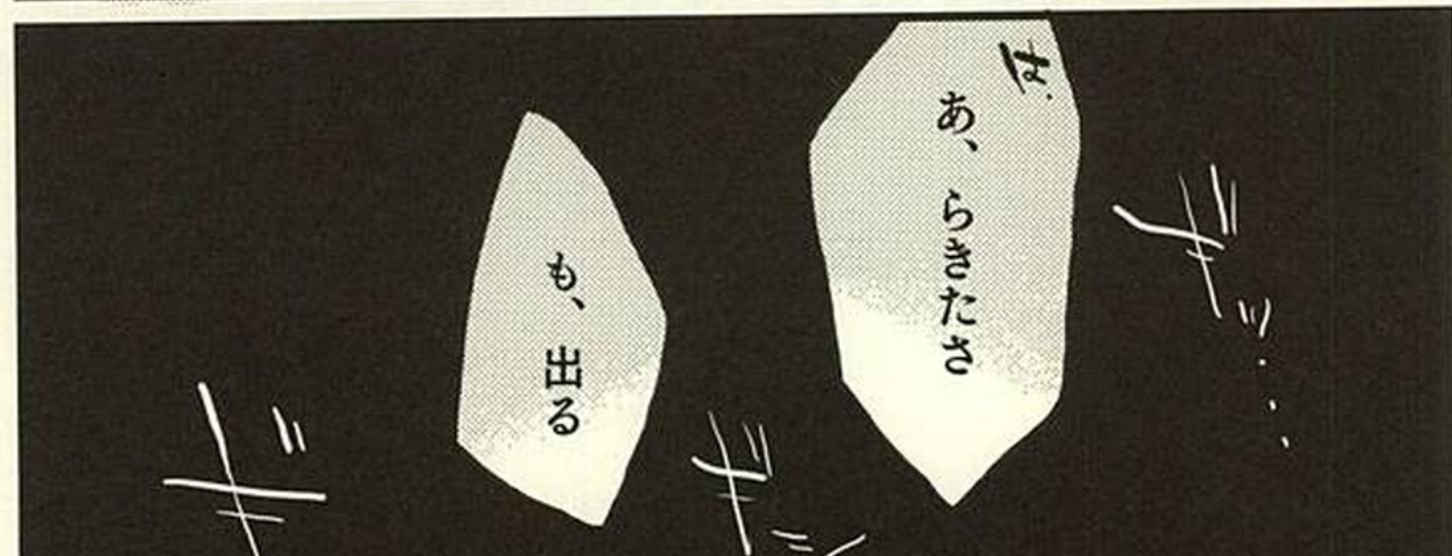


荒北さん



傍から  
見ていると  
お前たちは















出したくて  
出したくて  
ガマン  
してたんです

イイコに  
ごほうび  
ください



っ！

ココに



ね？

荒北さん

ちゅっ

飼い主は  
ペット  
猫の奴隷だって



米

不

米

之

米

之

米

之

米

。



アウトライダー





黒田雪成と付き合うことになったのは荒北靖友にとって予想外でも何でもない想定内のことだった。

——コイツはすこくわかりやすいから二オイ以前に視線でオレのことさういう目で見てるつてのはイヤでもわかったし。

荒北は自分が黒田から好かれてることをちゃんと気付いていた。黒田が荒北の通う大学に進学したのも、近所に越してきたのも、それが理由だということもわかっている。黒田はさくさくと勢いよく荒北の心の中に侵入してきて、荒北もそれが満更でもなかった。なんだかんだ言つて荒北も高校時代からずっと黒田が好きだった、ので想定内なのである。

好き合っているなら付き合おうかってノリで、二人の関係はあらかじめ決められていたかのように自然な形で収まった。

——付き合うことになったらアイツはますます可愛くなって、ちよつとしたことですぐ赤くなるし、距離詰めただけでびくりと身体震わせる。頭撫でてやると嬉しそうな顔して、まるでぶんぶんしっぽ振っている犬みたいだ。

とは荒北の談。黒田のイメージは柴犬とか小型犬のような愛嬌たっぷりの犬だ。しかし、されど犬は犬。犬という生き物は肉食であることを荒北はすっかり忘れていた。それをちようど今、荒

北は再認識させられている真つ最中だ。

「荒北さん。オレもう我慢の限界なんですけど」

「お、おう……」

お付き合いと言うものをするならば、そういうことも含まれることを荒北自身十分理解していたし、それも踏まえた上で付き合おうかと言つたつもりだった。黒田のこと考えて下半身が反応したことだつてある。それなりに性欲だつてあるし、まあ世間一般に漏れずやりたい盛りの年頃だ。だから、そういうことをしようと相手に言われたら大歓迎で、それなりに知識だつて得ようと調べてみるなど積極的な姿勢でいる。だがしかし、それは自分が主導権を握った上での行為しか想定していない、わけで。

荒北の性格的にたとえ好きな相手であっても、自分の意思に反してその相手のいいように扱われるのは我慢できない。だから、荒北の頭にまったくなかった。

「オレ……荒北さんのこと……抱きたい」

黒田がこんな風に考えていたことは、予定外で予想外だった。今押し倒されていることも、黒田が荒北を抱きたがつていることも、この調子だと本当に抱かれてしまいうさだということも。

「抱かれてえ、じゃねえの？」

自分を組み敷いている相手に思わずそう聞いた。荒北の中で黒田に抱かれるなんて考えたことは一ミリだつてない。なんの悪い冗談だつて思つて当然だった。にも関わらず、至極真面目な顔で黒田は頷いて、ベッドに横たわつた荒北の上に乗上げてぎゅつ



と抱きしめる。

「抱きたいです。アンタのこと。オレの突っ込んで、アンタのと善がらせたい。荒北さんかわいいし、きつとすげーえらい」

荒北の耳元でそう囁き、そのまま耳を甘噛みした。荒北は黒田の言っていることが全く理解出来ないでいて、本来であればコイツ何言ってるの？と頭を叩いて、自分の身体に乗っている黒田を突き飛ばしているところだ。しかし、ショックが大きかったのか、頭がちゃんと働いていないのか、されるがままになってしまっている。黒田の顔が近付き、やさしくゆっくりと口唇を重ねられてすつと離れていくさまを他人事のように荒北は見えていた。キスをした後、黒田は頬をこれでもかと緩ませていて、表情が幸せなのだと伝えてくる。黒田の方がよっぽどかわいいだろう、犬っぽくて。と荒北はそう思っ手を手を伸ばし、黒田の頭を撫でた。

——オレなんかを可愛いなんて言うのは黒田くらいで、そんな言葉と縁遠い容姿をしていることは自分が一番よく分かっている。それに、黒田の方がよっぽどそる表情を見せると思う。

先ほどキスした時も、近寄ってくる黒田の顔は色っぽい表情をしていた。舌を絡めれば、目はとろんとして頬は火照って赤く染まり、気持ちよさそうにうっとりとした表情を浮かべる。きつと攻めたてれば、嬌声を上げながら艶めかしく身体をぐねらせ、こちらの理性など完全に破壊させてしまふ姿を見せてくるだろう。

そんな男が、自分を抱きたい、と言う。荒北は何かの間違ったかと思えず、抱かれそうになっても一向に抗う気にならなかった。

荒北の抵抗がないのをいいことに、黒田はさらに愛撫を進めていく。こうして二人の初めてのセックスは黒田の献身的な奉仕と、荒北の順応力の高さで、滞りなく終わってしまった。

終わった後、荒北は茫然としながら横で眠る黒田を見つめる。流れるように自分が受け入れる立場で一連の出来事がスムーズに済んでしまったことが、未だに受け入れられないでいた。黒田は荒北の性格をよく分かっている、無理強いしない上、どこを触るにも荒北の許可を得た。煩わしいと思うくらい、乳首を触っていいかだとか、もう入れてもいいかだとか、逐一聞いてくる。荒北からすれば、そんな行儀がひどく焦らされているようにしか思えなくて、早くしてほしいと訴えてしまいそうになっている自分の身体を恨んだ。もつと恨めしく思ったのは、初めてのくせにやたら手際の良い黒田に対してだけだ。

挿入されるときの感触は気持ち悪いし、少々痛みもあった。でも黒田が一生懸命気持ちよくしようとしている姿や、黒田が気持ちよさそうにしている顔を見ていると、心が満たされ、もう一度してやってもいいなんて思っている。それほど、自分は黒田のことが好きなのだ、と気づいてムカついて、壁を蹴って気を紛らわせたのは、黒田が帰った後の話だ。

一度やってしまえば、もう遠慮なんてものはなくなる。黒田は



会った時に荒北を求め、荒北はそれを流されるように受け入れた。次第に異物感とか挿入時の気持ち悪さは気持ちよさに変わり、痛みもほほほなくなつた。すっかり行為に慣れて、前を触らなくても感じるようにまでなつてきてはいるが、出すものを出してもすっきりしない。

「気持ちいいし、最初ほどセックスへの抵抗はねえんだけどなア」  
心が、気持ちが、すっきりしない。そんな感じだった。

\*\*\*

ある日、大学の食堂で昼飯を食べている時に、近くに座っていた女たちの会話が耳に入ってきた。女たちは各々の恋人とのセックスについて話していた。昼間のこんな公共の場所だと、ぎよつとしながらも、荒北自身も先日から黒田とのセックスに悩んでいたこともあつて、ついつい聞き耳を立ててしまう。

「彼氏のこと好きだけどお、セックスがイマイチでさー」

「えー、もう別れなよ。身体の相性悪いとか最悪じゃん」

「でもお。セックス以外は最高なんだよ。やさしいし、大事にしてくれるし」

荒北は身体をびくつかせた。黒田はやさしいし、自分を一番大事にしてくれている。たぶん、世の中で言う理想の恋人だ。しかし、セックスは、と言えは……。身体の相性が原因なのだろうか。相性のいい相手だと、こんなにもやもやした気分にはならないのだ

だろうか。そんな思考回路に陥り始めた。黒田のことが好きなのに、セックスが楽しくない。それでもいいと思つてきたが、不満やフラストレーションが正直なところ溜まっている。付き合うともなれば、セックスがすべてではないが、大事な部分でもある。

「性の不一致で別れるとかよくある話だしなア」

気を抜いていたらしく、ほそりと無意識にそう呟いてしまい、狼狽していた女たちの会話を聞いていたことがバレってしまった荒北は女たちに睨み付けられ、あわてて席をはずした。

食堂を出てサークル棟に向かいながら、荒北はそもそもなにが不満なのか、と考えていた。性の不一致。先ほど自分で言った言葉を反芻する。

自分がやはり突つ込む側になりたいのか、と言えは、最初のころよりもその気持ちは薄くなつていた。それは挿入されて得られる快感を知ってしまったからだ。

「つか、黒田は下手つてわけじゃないしな。痛いとか気持ち悪いだとか、そゆのねえし。じゃあ、オレは何が不満なんだ？」

自分でもなんでこんな気持ちになつていいのかわからなかった。でも、回数を増すことに何かに対して不満を持っている。それだけが今、荒北自身が分かっていることだった。

「……マンネリ？」

と言うほど、回数は熟していない。黒田の攻め方だつてワンパターンではない。黒田も黒田で順応性が高く、すっかり抱き慣れたよう、ベッドの上以外で致してみたりだとか、体位を変えて



みたりだとか、そういう意味ですごく積極的だ。

「アイツ、こんなことまでクソエリートだからな。マジ腹立つ野郎だぜ」

最初に見せた余裕のない表情などはもうなくて、したり顔でアタタここ好きでしょ、とか言ってる攻めてくるところが腹立たしい。さらに腹の立つところは、実際そこが気持ちいいことだ。

「余裕なかった時のが、可愛げつつももんがあつたな」

余裕なく、いっぱいいっぱいになって顔を歪め、射精を我慢している顔だとか、出そうになる瞬間、我慢していた声をあげる姿だとか。そういう黒田が可愛いと思うし、そういう姿が見たい。

初めてセックスしたとき、受け入れた黒田の性質が自分の中で動くのが気持ち悪くて、痛みもあって、気持ちいいとほど遠い行為だったけれど、その表情で満足して、セックスってこういう気持ちになるからするんだと思った。そして、最近の黒田とのセックスでは、そんな黒田の姿を見ることはないし、あのとときの興奮ほどのものは得られない。

余裕のない黒田が見たい。あわよくば善がらせたいし、攻められて喘ぐ黒田を撫でてやりたい。きつとそうすれば、こんな不満なんてなくなるだろうと、荒北は考えて自分の髪の毛をぐしやりと掴んだ。

\*\*\*

練習の後、黒田は荒北の元にやってきて、今日も家に行きますと、ほそりと耳元で言ってきた。明日はちようど部活も休んで、きつと二人で荒北の家に行き、飯を食い、そのあとセックスをする気でのるだろう。毎回そうだから、間違いなくそうだと荒北はため息をこぼした。

いつも通りのセックスならば、出来ればもうやりたくない。虚しさが拭えないからだ。正直なところ、ずっとそのことばかり考えていてムラムラはしているが、いつも通りのセックスを想像した途端、すぐに萎えてしまう。それが、黒田が善がり喘ぐ姿を想像すれば、すぐにペニスに降起し、やる気になってしまうから、現金なものだと荒北は自嘲した。

するならば、黒田のそういう姿が拝めるセックスがしたい。そうなることや自己が黒田を抱くことしか解決策はないのだろうか。今更交代しようと言ってみて、黒田が納得するとは思えない。

そんなことを考えながら家に帰ると、先に帰っていた黒田が夕飯を作って待っていた。

「おかえりなさい」

とろけるような眼差しの中に欲望の色が見え隠れする。考えていることがわかりやすい。自分を抱く気なのだといやでもわかる。びびしと伝わってくる。

「男同士って難しいよなア……」

普通の男女間であれば、こんなことで悩まなかったのではない



だろうか。深く考えず、ただ思ったことを言葉にしてしまった。ところが、この言葉はあまりに無神経な言葉で、黒田は急に顔をこわばらせ、固まってしまった。黒田の異変に荒北はすぐに気付いて、どうした？と声を掛けた。すると、黒田は今にも泣きだしそうな顔をして荒北を見た。

「やっぱり、オレと付き合ってるのイヤなんですか？」  
「ハア？」

黒田の目からとうとう涙が溢れだした。

「荒北さん、オレ、別れたくないです」

「ちよつ、まっ！落ち着けて。なんで、んな話になんだヨ」

「だって、最近ずつと荒北さん悩んでる顔してるし。……セックスするのちよつと嫌がってる気がして」

態度に出していたつもりはなかったが、よくよく思い返せば、初めてセックスした後しばらくは嬉しそうにしつぽを振って寄ってきて、セックスをしたい雰囲気を探わせて、荒北はそれをクツセエ！とか言いながら怒っていた。しかしここ数日の黒田は、セックスをしたがるのは変わりないが、荒北の様子を伺いながら迫っているように見えた。荒北がそんな風に黒田の変化に簡単に気付けたのだから、黒田は黒田で荒北のちよつとした気持ちの変化をすぐに気付いていたのかもしれない。そういうところまで高校時代にきつちりと盗んで身に着けてしまった男だ。荒北は観念するか、とため息をもう一度深く吐いた。

「ちげエって。嫌いになんさなつてねエ。ただよオ……なんつー

か、オメエとヤんのがさア。なんかしつくりこねんだよね」

荒北がそう言うと、黒田は顔をさらに青くして、下手だということでしょうかと、正座しながら訊いてきた。

「そゆんじゃねエんだって。下手なり痛いなりだったらまだ解決策もあんだらうけどヨ。ちげーんだよ。オレもよくわかんねエから、ずつと考えてんだヨ。オレだって、オメエとそゆことすんのイヤじゃねエし。でもなんかさー、とりあえずしつくりこねエって言葉が一番あつてんだよなア」

答えも出ていないのに、こんなことを言っただけで不安にさせるだけだと思つたが、別れたいわけじゃないことを伝えるには、もうはつきりと思つていふことを言うべきだと考えて話した。嘘をついても結局話がややこしくなるだけだ。黒田の性格を考えると間違いなくそうなる。荒北は腕を組んで、うーんと唸った。黒田は黒田で自分だけが満足していたのかと、シヨックを受けつつ、荒北も満足出来るようにするためにはどうしたらいいのか考えあぐねる。

「荒北さんのためだったら、ケツ使ってもらう……のも……最悪の場合……やぶさかでは……。でも、ナカ入って揺さぶつてる時の荒北さんの表情、ほんとえろくて……。オレ……大好きだし……交代でやる、とか……三回に二回くらい……」

苦肉の策、といった感じで黒田がそう言ってくるから、荒北は大笑いした。

「そんなに掘られるのがイヤかよ」



思わずペシリと頭を叩いて突っ込んでやると、黒田は叩かれた箇所をさすりながら、誤魔化すように苦笑いを浮かべた。

黒田がそう言ってくれていても、実際のところ、黒田の中にペニスをつっこんだところで、もはや本当に解決するのだろうか。と黒田はまた考え始めた。別に黒田に入れられるのが嫌なわけじゃないし、むしろいやいや受け入れ側になられるくらいなら、自分が受け入れる側でいる方がいい。でも、今のままでは……と思考が堂々巡りになる。

「これはわがままになんのかなア……」

結局その日のうちに悩みの決着がつくことはなく、二人はセックスすることなく、二人背を向けあって眠った。

\*\*\*

ある日、黒北は自転車部の先輩から分厚い何かの入った封筒を手渡された。ちよつと、親がしばらくうちに泊まるから預かってくれ、と言われて渡されたその封筒には、DVDがケースごと何枚か入っていた。なんとなく気になって家に帰って中身を見てみると、そこに入っていたのはエロDVDで、しかもSMモノばかりだった。

「うわあ……。先輩ってそゆ趣味なのかヨ」

黒北もDVDは何枚か持っていて、好みのAV女優がいるほどには興味を持っている。しかし、SMと書かれたものを手にしよ

うと思ったことは今までなかったし、周りに興味を持った者もいなかった。今日の今日まで黒北の目に触れることのなかったものだった。黒北は固唾を飲んでそのパッケージを眺める。緊縛ローソク攻め、スパンキング、見慣れない文字が羅列されているが、なんとなく察しはつく。所謂アブノーマルな内容だろうと。

その中の一つを手にとってパッケージを見ると、赤い縄で縛り上げられ、梁に吊られている女性の写真が載っており、女は苦しうに顔を歪めて相手の男を見ている。愛しているなら、痛めつけるのではなくて、甘やかすべきだろう。セックスとはそういうものだろう。やはりこの性癖に関して理解出来ないと黒北は眉をひそめる。しかし、吊られている女の目はどうも嫌がっているようには見えない。むしろひどく興奮したいやらしい顔をしている。自ら縛られ、痛めつけられることを望んでいるような表情だ。痛めつけられて苦しめられたいなんてことがあるのだろうか。しかし、実際にSMに興じる者がこの世の中には居て、それが愛の営みとして行っている者も居ると聞く。この女は痛みや苦しみを求めている。相手はその望みをかなえているのだろうか。そう考えると、黒北はこのAVの中身が気になり始めた。

黒北はパッケージにいる女優の顔を黒田の表情に重ねた。SMの知識はないし、ましてやM側の気持ちもわからない。けれど、逆にこんな風に相手の顔を歪ませたいS側の気持ちは少しだけわかる気がした。黒田のすました顔が歪み、快感に流されそうになるのを必死に堪えながらも、その波に飲まれて声を漏らしてしまう



姿を想像してみれば、ひどく昂奮する。どうしてこの縛られている女はこのような恍惚に溺れた顔をしているのかが気になった。もしかすると自分の中身の解決の糸口にたどり着けるかもしれない。荒北は自然とDVDのパッケージを開け、プレイヤーに押し込んでいた。

テレビ画面が黒くなり、真ん中に白い文字が出る。それから画面が切り替わり、若いかわいい顔をした女と意地の悪そうな笑みを零している男が映る。男は女の長い髪を手にとりて指の間からさらりと流してはまた掬い上げて、手が櫛のように髪を梳いていく。女はうつとりした目つきで男を見つめ、それに気づいた男は女にキスをした。繰り返されるキスがだんだん濃厚なものへと変わっていき、男は口唇を貪りながら、ゆっくりと撫でるように女の衣服を脱がせていく。女は堪らず甘い溜息を漏らした。ここまでは一見普通のAVだ。むしろラブラブ系の甘ったるくてまどろっこしいAV。自慰目的では刺激が足りないレベルで、自分なら間違いない借りないレベルだと思いつつながら自進めていく。

「パッケージ入れ間違えてんのかア？」

映っているAV女優が好みの顔と体型をしていることもあり、荒北はせっかくだからとそのまま見ることにした。しばらく見ていると肌を撫でキスを浴びせていた男の表情が急に変わっていく。腕に着ていたシャツを絡ませて腕が抜けずに身動きが取れない状態なるように中途半端に脱がせた女を男はベッドに押し倒し、ブラジャーに包まれたおっぱいを手のひらで包んでぐいぐいと揉み

しだいた。男の手はとても大きく、女は大きい乳房をしているのにすっぽりと収まっている。柔らかい肉が形を変えてはまた元に戻る。そのさまは荒北の欲望に火をつけた。じわりと下半身が疼き、荒北は下半身に手を忍ばせる。画面の女も両太ももを搾り寄せて悶え始めた。

『なんだ、もう欲しいのか、淫乱め』

相手の男がそんな女にねっとりとした声でそう言い放つ。言われた女は頬を赤く染め、首を振って否定をしながらも、うち太ももを搾り寄せることをやめない。タイトスカートがだんだんとめくりあがっていき、ストッキングで包まれた太ももが露わになった。男はそのふとももについと指を滑らせ、女は息を詰まらせた。

『いやいやじゃねーだろ。感じてるくせに。もう入れてほしいのか、我慢のない女だな』

男はそう言うや否や、勢いをつけて手を振りかざし、女の太ももに平手打ちをした。破裂音に似た高い音がびりりと響く。

『ああっ!!』

女は悲鳴に近い声を上げた。かなりの強さで叩かれたせいで、白い太ももが赤く手の形通りに腫れている。男は重ねるように腫れ上がった箇所にもまた平手を入れた。パシン、パシンと聞くからに痛そうな音を立てる平手は止まらない。女の太ももは両側とも全体的に真っ赤に腫れ上がった。女は涙目で眉をひそめているのに、逃げる素振りを見せない。それどころかもっと痛ぶってほし



いと言っているように、太ももをこすり合わせるのを止めないでいる。

## 『この、淫乱め』

男に罵倒されるたびに女は身体を戦慄かせ、瞳は期待と欲望が入り混じっていた。荒北は食い入るように画面を見つめ、こくりと唾を飲み込む。罵声や平手など、ふつう人は求めない。しかし、この映像の女はそれを求めていて、痛ぶっている男は女の欲求を満たしてやろうとしているようにしか見えなかった。これはAVだからそう見せようと作られているのだろうか、と考えたが、もしそうであれば女優の表情は大女優だ。本気の表情にしか見えなかった。

女は身体をひっくり返され、尻を突き出した体勢にさせられた。男は女のタイトスカートとフォックを外し、するりと足から抜き取る。ページュのストッキングに包まれた尻をひと撫ですると、力任せにストッキングをずり下げた。ふるつとストッキングによつて締め付けられていた尻が開放された弾みで揺れる。男はさらに下着を引き寄せて尻の割れ目のほうに布を寄せ、尻たぶを露わにさせた。白くて艶めいた肌がこちらを誘うように揺れる。荒北はずつと映し出されている尻を凝視していた。次の瞬間、シユツと音が鳴りそうな速さで男の平手が飛ぶ。パシンと先ほどよりも大きな音で平手が尻にぶつかり、女が悲鳴をあげた。先ほど太ももに施された腫れよりもさらに赤く痛々しい、人の皮膚はこれほど色が変わるものなのかと思った。一見暴力を加えられた跡だ。

にもかかわらず女の顔は上気し、恍惚とした表情を晒している。

その表情に心を驚愕まれて、荒北は画面から目を離せなくなっていた。荒北の頭の中で女の顔が黒田の顔に変わっていく。黒田が瞳から涙をこぼし、恥辱で顔を赤く染め、開いた口からは唾液が流れるさまを想像して、荒北はひどく興奮した。たまたまなくなって血管が浮き出るほど怒張した昂ぶりを手のひらで包み、数回こすれば、程なく達した。ひどい脱力感が訪れ、近くのティッシュケースを手探りで引き寄せて後処理をする。こんなに興奮したのは久しぶりだった。まだ荒北の鼓動は早いままだ。黒田と初めてセックスしたときよりも興奮していた。

自分の隠れていた性癖に気づかされて、しかもそれが異常な部類のものだ。そんな事実には荒北はショックを隠せない。それでも欲望と好奇心は抑えられず、荒北は他のDVDもプレイヤーに押し込んだ。

\*\*\*

先輩から預かったDVDを、結局全部観てしまった荒北は、ずつとほんやりしていた。頭の中ではDVDで観た映像が流れ続けている。しかも女優の顔が黒田にしっかりと変換されている始末。まるで洗脳されているかのようにそればかりが頭を過ぎり、次第にSMとは案外普通のことなのではないか、と感覚が麻痺してきていた。今度そういう雰囲気になったときに、近いことを試してみ



「ようか、と思うほどまでに。」

「荒北さん？」

声をかけられて、驚きその声の先を見ると黒田がこちらを不思議そうな顔をしてみている。

「な、なんだヨ！」

先ほどまで痴態を妄想していた相手がいきなり現れて、荒北はひどく驚いて思わず吃らせた。

「いや、今日ずっとほんやりしているように思ったんで。熱とかないですよね？」

黒田はそう言って荒北のおでこに手を当てたので、荒北は思わずその手を払って、なんもねエと強い口調で返した。

「じゃあ、走りにいきましようよ。久々に一緒に」

勝負する気満々の顔を見せる黒田に、こういうところが好きなのだと思わず口元を緩ませる。荒北は仕方ねエなど言いながら立ち上がり、すぐさま黒田と練習コースへと向かって行った。

練習が終わって、帰る準備をしているとすでに支度を済ませた黒田がうれしそうに尻尾を振りながら近づいてきた。

「荒北さん、飯行きましよう！ 今日オレが勝ったから奢ってくださいよね」

「……バアカチャン。んな約束してねエだろ！」

黒田が飯に行こうと言うのは、荒北の家に行きたいという意味だ。もちろんセックスのお誘いも込みであるのは暗黙の了解で、

荒北は拒否したことがないし、拒否する理由もない。だから、荒北が返事をしなくても、それはOKだということを黒田はちゃんと理解していて、荒北がどう言おうが何も気にせず荒北の家まで犬のように引っ付いて一緒に帰る。途中適当に夕飯を済ませて、家に帰ってくると早速黒田はお預けを食らっていた犬がよしと言われたときのように、荒北を後ろからぎゅっと抱きしめた。

「おい、今日汗かいたからやめろって」

「大丈夫ですって、オレ荒北さんの二オイ好きなんで」  
そう言って、すんと鼻を鳴らした。

きつと今から黒田はこのまま荒北を振り向かせ、キスを繰り返して、そのまま押し倒されて、セックスしてもいいですか、と口にはせず顔で訴えてきて……。いつもの流れがやってくることを荒北は覚悟した。こりつと尻の辺りに当たる黒田の中心に気付いて、心が萎えてくる。ちらりと視界に紙袋が入った。DVDが入っている先輩からの預かり物である紙袋だ。中身のDVD映像が女優の顔は完璧に黒田の顔にすり替わった状態でフラッシュバックする。昼間頭をちらつかせていた黒田の痴態が荒北の頭の中を占領する。

黒田の手が荒北の身体を這い、口唇を軽く突き出して荒北の口唇に吸い付いた。荒北が予想したとおり、黒田のペースでことが進もうとしている。荒北はそれを甘受しながらも、頭の中では黒田の自由を奪うことばかり考えていた。自由を奪って、辱めて、恥辱で悶える黒田が見たい。目の前にいる現物と妄想が入り混じっ



て荒北の股間が膨らみ始める。黒田はそれを自覚できなかった。

「えっ。荒北さん、今日は積極的じゃないですか。オレ……嬉しい」

黒田の表情は安堵と喜びと興奮が入り混じっただらしないもので、荒北はそれをかわいいと思った。セックスに違和感を覚えてから黒田の顔を見ることなくセックスしていたことに気づく。もつとこの表情が崩せたら、そう思うと荒北の欲望は止まらなかった。

「黒田……」

「なんですか、荒北さ——」

甘ったるい表情を浮かべた黒田の腕をつかんで、そのままベッドに押し倒した。

「えっ、なっ……」

予想していなかった出来事に黒田は狼狽え、抵抗しだす。荒北はそれを抑え込もうと黒田の腰の上に乗ってマウントをとった。

「くろだ……」

荒北の切羽詰った表情に黒田は息を呑んだ。荒北がこんな表情を見せたのは初めてのことで、黒田はドキドキと胸を高鳴らせて、抵抗を弱めた。荒北は黒田の着ているTシャツの裾から中に手を突っ込み、ゆっくりと肌に手を這わせる。その感触に黒田はうっ、と声を漏らし、眉をひそめた。

「気持ちワライ？」

明らかに気持ちよさそうに見えるように見えるが、荒北はあ

えてそう訊いた。すると黒田は黙ったまま、恥ずかしそうに首を横に振る。荒北はニヤリと笑みをこぼし、さらに手を進めた。突起の部分が指に触れて掠める。その瞬間黒田はびくっと身体を震わせた。

「オメエって案外敏感？」

「んあつ、あ、アンタだつてここ触ったらそうなるだろ……」

必死に快感から逃れようと身体を自ら揺さぶって荒北の手を己の身体から離そうと試みるも、荒北は器用にそれをすり抜けて、だんだん固くなっていく突起を執拗に弄ぶ。そのたびに黒田はびくりびくりと反応するから、荒北は楽しくて仕方ない。

（欲しかったのはコレだ。でも、こんなじゃまだまだ足りねえ）  
荒北は黒田のTシャツをめくり上げて、片手だけシャツを脱がせると、そのシャツをねじって腕に絡めてきゅっと結び、両手を拘束した。

「うげっ！ ちょ、荒北さん何する気ですか?! 手がっ、手が動かないんですけど。ま、まさかオレ、アンタに抱かれるんすか? ちよつと待って、いきなりはっ……こ、心の準備がっ!!」

「うっせえ、ダアつてろ。掘ったりはしねえから」

また抵抗を始めた黒田を身体で抑え込み、拘束した手を頭の上を持っていく。先ほどまで刺激を与えていた黒田の身体は敏感なままで、もう触れていないのに胸の尖りは硬くなったままであるし、中心の昂ぶりはスポンの布を押し上げている。こんなことをされているのに、黒田はしつかり興奮しているらしい。



「抵抗して文句言う割にはすげー身体が期待してるって言ってるじゃねエか。この変態野郎」

黒田が自分の口唇をべろりと舐めた。それは黒田が興奮しているときにやる仕草であることを荒北は知っている。すらすらとAVで見たSの台詞が頭に浮かび、罵ってやると黒田はきゅっと口を噤み、真つ赤な顔で荒北を睨み付けた。必死になって平然としているように見せようとしている黒田がいじらしく、荒北はもっと暴きたくなった。我を忘れて乱れる黒田はきゅと、かわいく、やらしいはずだ、と。

「黒田……。動いたらクロス」

荒北はふいに黒田から離れて、そのまま洗面所まで向かった。セックスに使うローションと、スポーツタオル。それらを手に急いで戻ると、黒田は言いつけどおり先ほどの状態のままおとなしく待っていた。

「お、えらいじゃん。大人しく、待て」が出来てんじゃナイ

「あ、荒北さんが動いたら殺すって言うからでしょ！ そろそろ手のやつはずしてくださいよ。これじゃアンタのこと抱けない」

黒田はまた暴れて抵抗し始めた。そんな黒田を荒北はまた自分の身体に体重をかけて乗り上げて押さえつける。そして、持ってきたスポーツタオルで目を覆って目隠しした。

「んあ、何、やつ、何も見えねエ……。荒北さん！」

「うっせエ、聞こえてんだヨ。でけエ声出すな」

「見えねーのすげー不安だからっ、やだっ！ 荒北さん、はずし

て」

「バアカチャン、何のためにしたと思ってんだヨ。しばらくそのまままだかな」

さっきまで触れていた黒田の肌から手を放すと、黒田は不安そうに何も見えなくせにキョロキョロするように首を横に振って荒北の居場所を見つけようと必死になっている。それがかわいくて、荒北はくくつと笑った。

「笑ってないで、これ外してください。ちょっと、本気でこわい。荒北さんどこですか？ 何するんですか？」

声色に余裕の無さが表れている。拘束されて視覚も失われ、自分で何も出来なくなったときの恐怖。それに近い気持ちになっているのだろう。

「ここにいつから、安心しろ」

荒北が黒田の肩に手を置くと、少しだけほっとした様子で、竦めていた肩の力を抜いた。それを見て荒北は黒田のスポンのベルトを外しにかかる。バックルを外し、しゅるりとスポンから引き抜いた。更に前ボタンをはずし、チャックを外して、下着ごと引っ張る。黒田は期待と不安に胸を膨らませながら尻を浮かせて脱がせやすい体勢をとった。身に着けているのは靴下と、手に絡まっているTシャツ、そして目隠し。裸よりもいかがわしい格好をしている、しかもどんな風になっているか自分の目で確かめられないもどかしさと不安。黒田は出来る限り身をよじって縮こまろうとするが、荒北に阻まれて、ひざ立ちの状態にされる。



「すげー勃たせてんな、オメエ。こんなことされてフル勃起して、マジで変態なんじゃねエの？」

荒北のひさが黒田のペニスを優しく撫でる。黒田の口唇がうっすらと開いてそこから舌が顔を覗かせ、下口唇を舐めた。

ここ最近のセックスで見せていた黒田の表情とはまるっきり違う。求めていたものによく手が届きかけているような気持ちで荒北は黒田の表情を見つめる。

(顔が見てエ……、目隠しが邪魔だ。でも、今は外せねエ)

荒北は黒田の腕を掴んで、ひざ立ちしている黒田を立ち上げさせた。足元をふらつかせながら立ち上がる黒田の手を引っ張って、部屋の中を歩かせる。

「えっ、あ、荒北さん？ど、どこ行くんですか？」

不安そうに訊くも荒北に無視される。まったくどこにいるか分からない上、今している自分の格好は人に見られてはまずい格好だ。まさか、人に見られるような場所に連れて行かれるとは思わない。でも、ただでさえ、自分の部屋じゃないところで心もとない格好で、かなり歩かされている。それだけでも恥ずかしくて死にそうなのに、どこに連れて行かれていくかわからないのは、味わったことのない怖さがある。緊張と不安でバクバクと心臓が身を突き上げるように騒ぐ。黒田はさらに目をぎゅつと瞑って、疎む足を不器用に動かして歩き続けた。ある程度歩いたところで荒北は急に歩みを止める。すると、ガラス戸の鍵の開く音が鳴り、カラカラと扉を開ける音がした。

「えっ……」

穏やかな向かい風が身体を撫で、外気だと黒田はすぐに気づく。

「そ、外?!」

「おう、ベランダの扉開けた。今はまだ室内。これからどうするかもうワカんだろ？オレがオメエにどうして欲しいのか」

荒北はベランダに出ると言っているのだと黒田はすぐに理解した。ほぼ全裸に近い状態になっている状況でそんなことをするなと考えられない。もし、誰かに見られてしまったら、黒田も荒北も終わりだ。

「む、無理っ。荒北さん、さすがに無理ですって!!」

「黒田、大丈夫だ」

「で、でもお……」

「オレのこと信用出来ねエの？オレが大丈夫だってんだから、大丈夫なんだヨ」

黒田はこくりと生唾を飲み込んだ。荒北は大丈夫だと言うが、何を根拠にそう言えるのだろう。ベランダの向こうには学生マンションが建っている。自分たちの住むアパートよりも高いマンションで、黒田の知り合いだって何人が住んでいる。もう夕方、あたりはゆっくりと暗くなるうとして、部屋の明かりも手伝って、向こうのマンションのベランダから見ようと思えば見えるだろう。

(さすがに、これ以上は無理か)

荒北があきらめて、もう部屋の中に入れ、と言おうとしたとき



だった。黒田がゆっくり一歩一歩と前進した。

「……あらき、たさ……」

羞恥と不安で今にも泣き出しそうな震えた声で、黒田は荒北の名前を呼んだ。戸惑っているけれど、なんとか荒北の命令に答えた、そんな気持ちで声をから感じた。荒北はせめてこれくらいはと、黒田の頬を撫でた。その手に黒田は自らも頬を擦り付ける。黒田はフローリングからコンクリートの床に足を着けた。その感触に身体をびくつかせた後、二、三步歩いて黒田はその場にへたりと座り込んだ。

「はあ、はあ……あ、荒北さん……。で、出ましたよ、べ、ペランダ……」

ただ歩いただけなのに、激しい運動をしたように息を荒げ、身体はずっと震えている。しっかりとペニスを勃たせたままで、それを隠そうと身体を振じらせ、太ももをすり合わせる。羞恥と不安に耐えながらも必死に自分の要求に応えようとしている黒田が愛おしくて仕方がない。黒田はもうきつと開放してほしがっているだろう。それに応えたい衝動に駆られる。しかし、ここで終わらせては意味がない。

荒北も不安だった。この時間帯同じマンションの人間も向かいのマンションの人間もあまり家にいないし、こちらのペランダの見える位置に人が現れる時間帯ではない。それ以前にペランダの手すり壁のせいで、黒田の身体はすっかり隠れている。見えたとしても黒田が立ち上がってようやく肩くらいが見える程度だ。だから、見つ

かる心配はしていない。荒北が不安に思っているのは、黒田に自分の欲をぶつけて、無茶をさせていることで黒田がどう思うかだ。

元々そんな趣味もないのに(間違いなく素養はあるが)、こんなことに付き合わせて嫌われてしまうのではないかという不安だ。これがきっかけで別れを切り出されかねないことを頭に置きながら、もう始まったものは止められないと、ここまで来たのだから最後までやろうと荒北は腹をくくっていた。

「隠すんじゃねエ。脚を広げろ」

「えっ、む、無理ですっ!」

「他からは見えねエつつつてんだろ。オレにしか見えてねエ。オレにしっかりと見せろよ」

荒北が強そう言うのと、黒田は両足をもじもじさせた後、両足を前に伸ばしてゆっくりと開脚する。脚はペタリと地面に着いた状態で、なんとか自分の股間を少しでも隠そうとしているようだった。「だめだ、もっと見えやすいように、脚を三字にしろ」

「んっ、ひあ……」

黒田はもう通常の精神状態ではなくなっていた。出てしまった変な声がいやでも手が不自由なせいで口も塞げない。恥ずかしくて不安で仕方ないのに、それとは違った感情で黒田は胸を高鳴らせていた。ひどく興奮している自分に戸惑い、涙が溢れる。目を塞いでいるタオルが吸い取っていく。

「あ、らきた……さんっ、ぐすっ……あらきたさん……」

つらい、恥ずかしい、怖い。そんな感情たちが頭を支配し、逃



げ出したくなる。でも、ここでもし、拒否したら……。いやだといつて、何とかして目隠しをはずし、部屋の中に逃げたら、荒北はどう思うだろう。荒北は自分を信用出来ないのか、と言った。大丈夫と言ったら大丈夫だと言った。

「あらきたさん……」

荒北が好きだ。その気持ちは黒田の中にとつとある。でも、荒北の言うことを信じて、それに身を任せたらいいなどと、今まで考えたことがなかった。ずっと好きだった先輩が、自分の気持ちを受け入れてくれたことがあまりにうれしくて気持ちばかりが先行していた。もっと好きになって貰いたくて、頼りにされたくて背伸びばかりして、荒北がどう思おうかを勝手に決め付けて確認もせず、ただ好意を押し付けていた。なんて自分勝手なのだろうと、いまさらながら反省し項垂れる。思いを寄せ合って、男同士にもかかわらず付き合うことは、普通の男女が付き合うことを決めるより覚悟の要ることだ。そこまでして自分といることを望んでくれた荒北に対して、自分の内側を見せることなく格好つけてばかりいるのは不誠実だ。セックスの受け入れる側までさせて、自分をよく見られたいとばかり考えて、情けない。自分の不甲斐なさに呆れて涙が出ると、黒田は天を仰いだ。

今、自分が出来るのは荒北を信じて、身を任せることだ。どんなに不恰好でも自分を曝け出して気持ちをつづけて、荒北が求めていることに応えたい。黒田はそう強く決意して、投げ出した足を自分の方に寄せて、M字に開脚して見せた。荒北は堪らずため

息を漏らす。

「……えらいね、雪ちゃん。こ褒美あげようね」

荒北は口元を緩ませ、黒田の頭を撫でながらぎゅっと抱きしめた。黒田は荒北と体温と匂いを感じて安心する。撫でられる感触が堪らなく気持ちがいい。ずっと不安で身体に変な力が入っていたのが、一瞬でふっと力が抜ける。もっと体温と匂いを感じたくて、荒北の方にしなだれ、荒北の首筋に顔をうずめ、頬を寄り寄せた。

「あらきたさん……」

黒田はどんな顔をしてこんな声を上げているのか、目隠しが煩わしい。荒北はどうとう黒田の目を覆っていたスポーツタオルを掴んで巻取った。現れた黒田の顔は涙と鼻水で顔がぐしゃぐしゃで不細工なのに愛おしくて仕方がない。

「きゅ、急に外さないでくださいよ！ ってか、ここ本気で外から見えそうじゃないですか！」

「案外見えねえんだって。んなに気になるんだったら、オメエのままオレの顔見ながら立ち上がって、辺り確認してみろよ」

涙腺が壊れているのかほろほろと涙をこぼしながら、プルプルと身体を戦慄させた。そんなこと出来ないと言いたくないものの、首を横に振って態度で示す黒田に、荒北は厳しく攻める。

「やれんの？ やれねエの？」

荒北に急かされ、黒田は焦った。先ほど自分で決意した、荒北の求めていることに全部答えようという意気込みは早くも崩れようとしている。しゃがみこんでいれば、またベランダの手すり壁が自



分をうまく隠してくれている。しかし立ち上がれば、今よりもずっと目立ってしまう。万が一、それが誰かの目に触れてしまったら。そんな不安が付きまとう。黒田は視線を荒北に向けた。荒北の息は少々荒んでいて、表情は獲物を狙う狼のようだ。ゴールを狙うときの表情と似ていた。純粹に欲しい、獲りたい、そんな思いから出てくる表情に。

(荒北さんがゴールを獲ろうとしているみたいに、オレ自身を求めてくれている?)

黒田は緩みかけた決意を新たに立て直して、ゆっくりと立ち上がった。手がまだ拘束されたままでも隠すことも出来ず、性器を晒した状態で立ち上がった。しっかりと立つのが怖くて、膝をかがませて立とうとする黒田をきちつと立てと言わんばかりに、荒北は膝に軽い蹴りを入れた。黒田はもうやけくそになって、身体をびんとさせて立った。もう恥ずかしすぎて目も開けられない。脚が震えて止まらない。逃げたくて逃げたくてたまらない。でも逃げてしまえば荒北を裏切ることになってしまう。そんな葛藤を頭の中で繰り返した。

「えらいね、黒田チャン。それから? 辺りは確認しなくていいのオ? どつかから見られてるかもねエ」

話が違ふ。荒北が見えないと言っからそれを信じて立ち上がったのに。黒田は不安が膨れ上がって、また涙を零した。

「あ、アンタが見えないっつうからオレ、信じてっ……!」  
ぐちゃぐちゃに泣きながらベランダに突っ立ったまま訴える黒

田に荒北は興奮してぞくぞくと身震いした。部屋から漏れる光が黒田の身体を照らし、白い裸体が暗闇に浮かぶように美しく輝いて見える。こんな無茶な荒北の命令を必死に聞こうとしている黒田がかわいい。元々好きだったけれど、もっと好きだと、改めて思った。

「よしよし。えらいな、黒田ア」

荒北は黒田に近づいて、ぎゅうつと抱きしめ、頭をゆっくり何度も撫でた。黒田は腰から力が抜けてまたへたりと座り込もうとするから、荒北はそれを支えるように抱きしめたままじつと動かずいた。

「くろだ……」

感情が昂ぶって何も言えなくて名前を呼んだ。黒田も同じらしく、荒北さんと何度も呼ぶ。

「言いつけ守った黒田チャンにご褒美やらねエとなア」

荒北はさらに攻め立ててやろうと、黒田から離れ、靴下を脱いだ。素足になった足を黒田の股間に押し当て、ぐいぐいと踏みつける。

「ん、あつ……、あ、あらきたつ、さんつ、んつ、ひあ……」

黒田はその刺激に耐え切れず、声を漏らした。黒田が艶っぽい声色で自分の名前を呼ぶから荒北の興奮にさらに火を点ける。さらに執拗に足の裏や指で黒田のペニスを刺せば、黒田は切なげに鳴くように喘いだ。顔は涙と鼻水、それから涎でぐちゃぐちゃだ。荒北は舌舐めずりし、今度は膝でペニスを撫でるように触って弄ぶ。黒田の嬌声は高さを増した。



「気持ちいいの？これが気持ちいいとか、オメエはマジでドMだな」

黒田の耳元でそう囁いた瞬間だった。黒田の身体が痙攣して、ペニスから精液を吐き出させた。その精液がハーフパンツから覗く荒北の膝から太もも、股脛を汚していく。荒北は少し驚いてから、その精液を指で拭い、その指を黒田の目の前に翳した。

「オメエ、出す時は出すって言えヨ。汚れちまったじゃねエか！」  
「うっ、うっ……すみません……」

言いつけを守れなかった子供のように涙をほろほろと零して、黒田は何度も謝る。そんな態度が荒北の嗜虐心を更に煽った。荒北は黒田に鋭い視線を送りながら、黒田の目の前で精液が絡まった指をちらつかせる。

「汚れちゃったからア、綺麗にしてくれねエ？」

黒田は一瞬ひるんだ顔を見せた。手を拘束されている状態でそうしろと言うことは、そういうことだ。自分の出した精液を舐めるだなんて、気持ち悪い。屈辱的な行為だと動揺する。通常の精神状態であれば、拒否して、むしろ怒るレベルの内容だろう。しかし、今の黒田はもう精神が荒北によって支配され始めていて、荒北の命令には絶対服従しなければならぬと思込んでいる。そしてそれが堪らなく気持ちいいことであるのだと身体が求めて行く。

「出来ねエのかよ。プライドが邪魔してんのか？オメエにとって、オレとのことはその程度なのかヨ」

プライド、と言う言葉が黒田にとってはトリガーだった。Mのスイッチが入る。無言で荒北の指をじっと見つめ、黒田は舌を伸ばした。

「おうおう。黒田、いい子だね」

精液がしたり落ちようとするのを指ごと舌で掬い舐める。卑猥な音を立てて吸い付いた黒田は恍惚に浸りながら荒北の指をいとおしげに嘗め回す。

「指の次はコツチね」

そう言いつて荒北はもう片方の手の指で自らの膝を指した。黒田は吸い込まれるように荒北の膝に顔を近づけて、べろべろと白濁を舐め取り始めた。荒北の膝、うち太もも、足の甲と飛び散った個所を順番に舌を這わせていく。荒北はその感触で思わず漏れそうになる声を必死に抑えながら、一生懸命舐めている黒田の頭を撫でた。

「もう、いいぜ」

あらかた綺麗に舐め取られたのを見計らって、荒北は黒田を止めた。黒田はまだ足りないと言う顔をしている。陶醉してしまっていた。

「おら、立て。中に入るぞ」

このままベランダには行為に集中出来ない。荒北は、黒田を立ち上がらせて部屋の中に入れることにした。黒田はいまだ手だけ拘束されている状態で、バランスを崩しながらもなんとか立ち上がる。荒北に押されて部屋の中に入ると、荒北はそのまま黒田



を寝室へと連れて行った。黒田は期待を膨らませ、ニヤついた顔をしている。今の格好とその表情ではただの変態だと、荒北は心の中で悪態を吐くが、荒北も似たような顔つきをしていた。

「おい、そこにしゃがめ」

寝室に入った瞬間、荒北は黒田に床に膝をつけるように指示し、自分のスポンのチャックを下げた。黒田はその様子で何を求められているか察知し、荒北の股間に顔を寄り寄せようと近付いた。

「やめろ。まだ命令していいエだろ？」

「こ、ごめんささい……」

「そんなに早くコレが欲しいのオ？ 舐めてエのオ？」

「はい、舐めたいです。舐めさせてください」

とろんとした目つきのまま、懇願してくる黒田に荒北は全身が痺れるほど心臓が飛び跳ねた。

「仕方ねエ我慢出来ねエ犬だな、オメエはよオ」

スポンと下着をずらして性器を取り出す。すでにそれは反応しかけていて、黒田はため息を零した。

「ほら、啜えろヨ」

荒北がそう言うと、黒田はがつつくように荒北のペニスにむしゃぶりついた。最初は口の中に入れて、口唇で抜く。するとペニスがむくむくと成長し、完全に勃起した。それに気をよくした黒田は、先端を舌で刺激したり、竿を横から啜えて口唇をスライドさせたり、タマの部分から会陰部にかけて舐めたり、思いつく限りの口淫を施していく。荒北は荒い息を吐きながら、必死に吐精

感を抑えようと下腹部に力を入れた。荒北も黒田にフェラチオをすることはあったが、こんなにも長く、ねちっこいオーラルセックスをしたことはなかったし、やらせることもなかった。黒田が荒北にフェラチオするとき、荒北はいつも目を瞑っていた。何でそんなもつたいたいことをしていたのだろう、口淫する黒田はこんなにもいやらしくてかわいいのに、と荒北はいまさらながら後悔した。

「あらひははん、ひもひいへすは？」

「……んああ、きもちい……マジやばっ……、んっ」

黒田は嬉しそうな顔をして、さらに口淫の速度を速める。荒北はもう限界に近づいていた。

「く、黒田っ。も、もついい……」

吐精寸前でやめさせて、荒北は黒田をベッドに寝かせた。黒田はずっと名残惜しそうに荒北のペニスに視線を送っている。もういつもの済ました顔をしてセックスを興じる黒田の顔は思い出せないほど、グズグズでとろとろした顔を見せる。黒田が、愛おしい。

「黒田、今度はこっちな」

荒北は下着を足から抜いて黒田の顔に跨り、そのまま口のところに自分のアナルが来るように座った。黒田の口が荒北の尻で塞がれ、息が出来ないと黒田はもがき始めた。

「オメエ、ここに入りたいんだろ？ だったら舐めろ」

荒北がそう言うと、黒田は必死に酸素を求めながらも、懸命に黒田の尻の周辺に舌を這わせ、丹念に舐め始めた。

「あつ、は、ふっ……。オメエの入れるためなんだから、しつかり



やれヨ」

黒田の舌の感触が気持ちよく、少しくすぐったくもあり、荒北は少しだけ腰を浮かせた。呼吸がしやすくなった黒田の舌使いが激しくなる。荒北はそのたびにびくびくと身体を揺らせた。ずつと穴の周辺を行き交っていた黒田の舌が荒北のアナルの中に差し込まれ、器用に動いてぐにぐにと入口を広げていく。

「んあつ、はあ……あつ、あつ」

黒田の舌は最初出し入れを繰り返して、穴が少し広がってくると、さらに広がるようにと周辺をぐいぐい押しながら舐めていった。すぼまっていた穴がだんだんと広がっていつている。

指も使えないもどかしさを感じながらも、己の舌と口唇だけで慣らしていく過程は黒田にとって楽しいもので、無我夢中で舐め続けた。穴がしつかりと広がってきたところで、荒北は黒田に愛撫をやめさせて、くるりと体の向きを変えた。

「あ、あらきたさん……」

「黒田ア、オレのナカ、入れてエの？」

「入りたいです。もうオレの限界なんです。早くアンタん中入ってぐちやぐちやに突きまくりたい」

「はあ？ オメエには主導権はねえんだヨ。入れてやってもいいが、オメエは動くな」

「そ、そんなっ……」

荒北は黒田にそう言い放つと、黒田の腰に跨り、ゆっくりと自分の腰を沈めて、黒田のペニスを自分の中へと誘い、ゆっくりと

沈めていった。

「ん、ああっ！ くう……んんん、は、入ったア」

普段よりも時間をかけてくれてはいたが、舌と口唇だけでの行為ではいつもよりも穴を広げきれなかった。黒田のほどほどに太いペニスを身体の中に鎮めるのに、いつもよりも圧迫感と抵抗を感じる。それでもいつもよりもずつと気持ちがいい。

「黒田ア、て、手エ」

身体をうまく支えられなくて、黒田の手を掴んだ。黒田はその手をきゅつと握り返した。荒北は掴んだ手に体重を掛けつつ体勢を整えようと試みるが、その瞬間、ぐりつと荒北の中を黒田のペニスがえぐる。荒北は堪らず声を上げた。

「オメエ、動くなっつってんだろ?!」

「ふ、不可抗力です!」

言い訳など聞いてやらないとばかりに、荒北は荒々しく自分の尻を黒田にぶつけるように腰を振る。

「うあつ、荒北さんヤバイ、ヤバイツツ!!」

どうやら黒田はもう達してしまっただけで、口唇を噛み締めて必死に耐えている。それが嗜虐心を煽り、荒北はリズムカルに腰をくねらせて、黒田の排出欲を促す。

「も、もう……あつ、ひつ、んああっ——!!」

黒田は身体をふるりと大きく震わせたあと、小刻みに震え、脱力してベッドに身を沈めた。どうやらイッてしまったらしく、今もなお射精は止まらず続いている。荒北は身体の中に精液を放たれてい



る感触を追った。

「ハッ！ いい顔してんじゃねエの」

荒北がそう言うと、黒田は悔しそうに口唇を噛み締めたまま、荒北を睨み付けた。その表情がたまらないと、荒北は身をソクリと震わせた。

たとえ自分が入られる側の立場であっても、主導権が自分で黒田を善がらせている状況にたまらなく興奮を覚えた。黒田のタイミングで挿入されるのではなく、自分のタイミングで自分のやり方で中に鎮めていくのは、今までとは違った感覚だった。心が満たされていくというのはきつとこんな気持ちなのだらうと荒北はフツと笑みを零して、また腰をくねらせ、セックスを再開させる。

黒田は与えられる快感に酔いしれ、動かしちゃいそうになる腰を必死で動かさないように身体に力をこめた。ここ最近のセックスで見せる余裕があつて、歪むことなく整ったままの顔を見せていた黒田とはまったく違う。目を瞑り、眉間やおでこにしわを寄せ、強く食いしばった表情をしている。これが見たかったのだと荒北は満足げにさらに強く腰を揺らした。

「黒田ッ。目ん玉かつ開いて、オレを見ろヨ」

もっと感じている顔を見せてほしい。自分を求め欲望でぎらついた目で自分を見てほしい。そうして気持ちよくなっている黒田の顔がみたい。そんな気持ちから荒北は命令した。黒田は恥ずかしがりながらもゆっくりと目を開け、欲と興奮で濡れた瞳で荒北を見つめる。

「……んあ、アンタ……すげーえろい顔……してるじゃないですかあつ……こんなえろいアンタ見れるなんて、オレ……マジでうれい」

蕩けそうな笑みを浮かべ、幸せだとつぶやき続ける黒田に、荒北は「ウツセエ」と吐きかける。荒北のほうも黒田の顔がすこいやらしくて、黒田と同じことを考えていた。それがとつともなく恥ずかしくなってしまうと、ついつい悪態を吐いた。そんな荒北の気持ちをなんとなく察したのか、黒田はさらに顔をニヤつかせるばかりで、荒北は「ウツセエ」とため息混じりに浴びせかけた。

今初めてちゃんとしたセックスをしている。お互いの気持ちや想いや感情をぶつけ合つて、食欲に求め合う行為が本物のセックスなのだ、と荒北は思った。

そろそろフィニッシュに近い。荒北は身体を支えるために握っていた黒田の手を更に強く握りしめ、腰のグライントをさらに強める。「あ、ああ……荒北さん。おねがい、おねがいます……。最後は、正常位がいい……です。だめ……、ですか？」

潤んだ瞳で懇願してくる黒田に荒北は言葉を詰まらせた。今の今まで荒北は好き勝手にやってきた。見たかった顔も十分見ることが出来て、満足感で満ち溢れている。セックスは欲のぶつけ合いだ。だけど、受け止め合いでもある。ずっと黒田が荒北の欲望を受け止めてくれた。今度は荒北が。荒北は動かしていた腰を止めると、前髪をかき上げ、黒田の瞳をじつと見つめ返した。

「仕方ねエな。許してヤンよ」



荒北は黒田に抱きつくような形で前に倒れこみ、自分の胸を黒田の胸に引っ付ける。近づいた口唇に自分のものを重ねて、食むようにキスを繰り返す。黒田はそれに応えながら、荒北の背中に手を回して、ころりと荒北ごと身体を回転させて、マウントを取ろうと身体を動かす。回転しているうちに、ペニスは荒北から抜けてしまつて、荒北の尻からたらりと黒田が放つた精液とローションが混じつたものが流れ出て、シートに滴り落ちる。

「うわあ、えつろ」

あまりに卑猥な情景にそう黒田が漏らすと、荒北が足を伸ばして黒田の身体に蹴りを一発お見舞いした。

「もう、口より足が先に出るんですから」

蹴りに鋭さはなかったけれど、それなりにダメージがあつて、黒田は蹴られた箇所を撫で、もう片方の手で荒北の脚の間に割つて入り、自分のペニスを荒北の尻穴に宛がった。

「荒北さん、入れますよ」

「……早くしろ」

「はい、今すぐ……」

二人してもう限界に近い。刺激が欲しくて仕方がない。黒田は勢いよく中に突っ込んだ。粘膜と腸壁がペニスに吸い付いて絡むように刺激を与えてくる。入れたばかりなのにもうイッてしまいたくて仕方がない。荒北が気持ちいいらしいところをしっかりと突いてやると、荒北は声にならない悲鳴を上げた。荒北が投げ出した手を黒田はすかさず握り締め、捻りこむように腰を打ち付ける。

荒北の肩や二の腕の筋肉が機械のように動いている。顔から首筋鎖骨の辺りまでの肌を赤く染め、息苦しそうに善がっている。時折頭を左右に振って、そのたびに髪の毛が枕カバーに当たり、パラパラと音を立てている。視覚、聴覚、触覚、五感がすごく敏感になつていて、一つ一つに興奮して、気持ちを昂ぶらせていく。

「荒北さん、きもちいい？」

今までもセックスの最中に黒田が荒北に訊いていた言葉だ。荒北の返事はいつも気のないものだったが、今日は違った。

「ああ、スゲー気持ちいい」

黒田は胸に熱いものがこみ上げ、ぎゅうっと荒北を抱きしめながら腰を動かす。もう今にも達しそうな状況だけれど、もう少しだけ、もう少しだけ、と自らに訴える。

「荒北さん、好きです、好きです」

「うあつ、んあ、お、オレ……もおつ、ンあつ、……好き、だ……」  
お互いが熱に浮かされて普段言えない甘い言葉を吐いたと同時に、二人して果てた。黒田は荒北に覆いかぶさるように身を預け、荒北は寝転がっているベッドに深く埋もれる。体力が激しく消耗し、けだるさと少々の痛みがあるけれど、それ以上に幸せな気持ちに包まれていて、たまらなく幸せだと、二人して思った。

脱力感がひどくて動きたくないなんて理由をつけて、二人はお互いを抱きしめたまま動かさずじばらく過した。

\*\*\*



いつの間にか寝てしまったらしく、ふと目を覚まして時計を見る  
と、また夜中の三時だった。ふと横を見れば、いるはずの黒田がい  
ない。荒北は驚いてベッドから起き上がり、家の中を探し回る。

「あ、荒北さん起きたんですか？」

「へ？あ、……おう」

黒田はベランダにいた。荒北が近づくと黒田は手を伸ばして、荒  
北の背中に手を回し、優しく抱きしめた。手には力が籠っている。

「身体大丈夫ですか？ 最後無茶させちゃったし」

照れながらそういうところはかわいいと思うが、昨日の行為はか  
わいくもなんともなかった。正常位を許した後、黒田は更に行為を  
ねだり、結局普通のセックスを三回もした。荒北は腰をさすりなが  
らも悔しくなって、別に平気、と返した。

黒田はそのまま冷蔵庫の前に向かった。

「ベプシ、要りますか？」

「ああ、くれ。投げんなヨ」

黒田は投げる振りだけして、荒北に手渡した。ボトルのキャップ  
をひねると缶の金属音が鳴る。この音が好きだと、荒北はゆっくり  
ボトルに口をつけて喉を鳴らしながら飲んだ。

「正直、昨日は驚きました。あんな恥ずかしいことさせられると思  
わなかったし。そもそも荒北さんにああいう趣味があるなんて知ら  
なかったです」

荒北はベプシの蓋をしっかりと閉じて、床にボトルを置くと、黒  
田の元に近寄り、後ろからきゅっと抱きついた。

「嫌いになったか？」

「いえ、びっくりしただけです。思い出ただけで顔が沸騰しそ  
うなほど恥ずかしいことをさせられて、不安とかで胸がつぶされそ  
うだったけれど、終わってみたら荒北さんがオレのことこんなに好き  
だったんだって思えたし、自分の悪いところとかもちよつとわかっ  
た気がして。だから、毎回は身がもたないけど……マタシテモイ  
デスヨ」

表情がすごく幸せですと言っているようだった。

「ハッ、くっこそ生意気なヤツウ」

黒田の鼻を人差し指ではじいて、荒北はまたベッドに潜り込んだ。  
黒田も便乗してその横に寝転がる。

「なあ」

髪を撫でながら、至極まじめな顔をして黒田を見つめる。

「なんですか？」

「今度はケツ叩いてもいい？」

「はっ？」

黒田の調教はまだまだ続く、らしい。

—了—

#### 参考資料

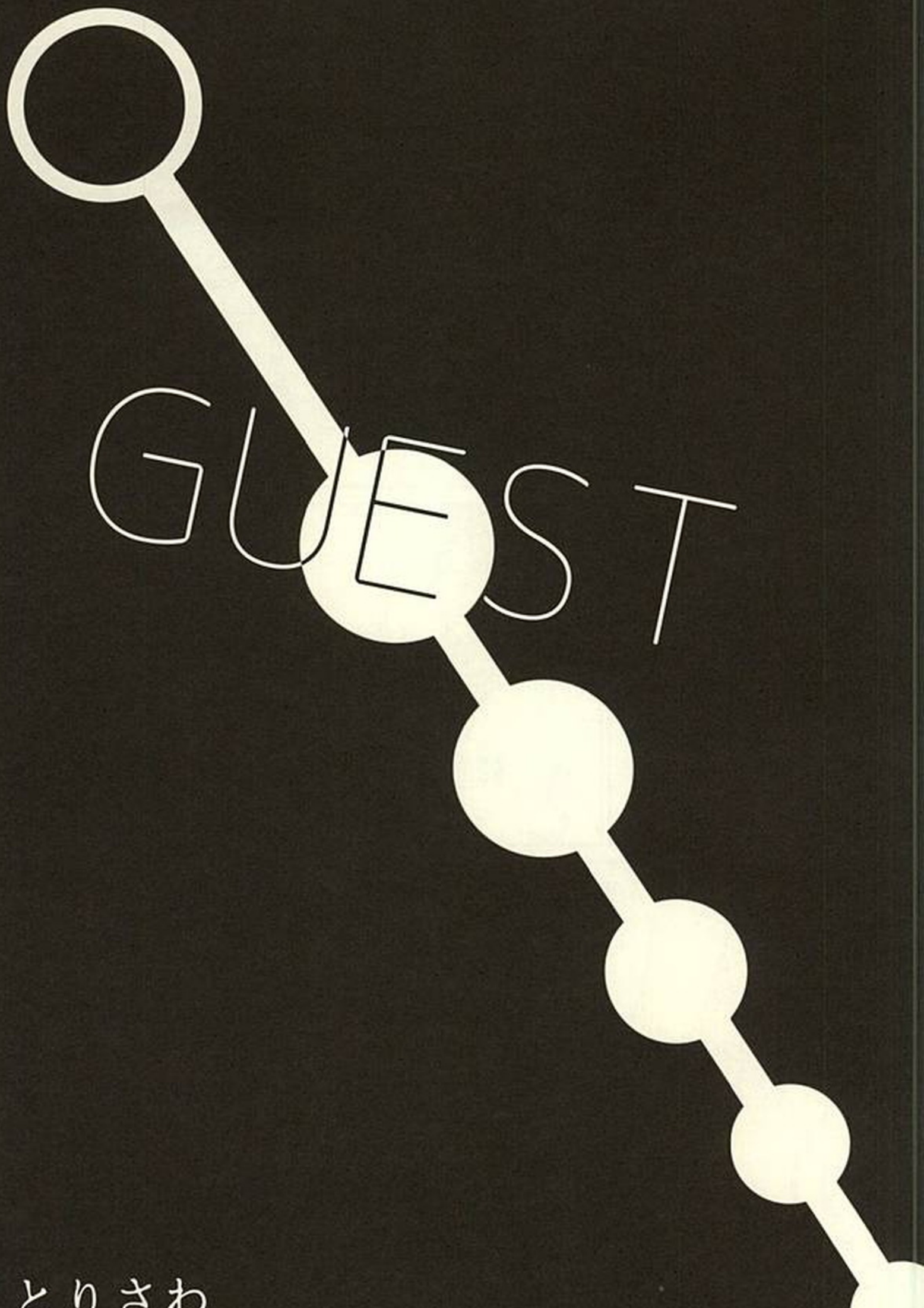
・団塊六二一九九『美少年』 新潮文庫

・香みちる二〇一四『ソフトSMのすすめ』彼を感ず四つのプレイ

・<http://koopit.jp/real/110820/> 二〇一五年八月七日アクセス

・甘崎太二二〇八・二〇一五『ナナとカオル』二五『ジエツツコミックス』





GUEST



かいたん → とりまの



先に味見  
しておく  
かあ?



へへッ...  
こいつは高く  
売れそうだけ

くっ...!



誰だ!?

トリカ

キ

ニカ

!?



逃げてください!

危険です

荒北さん...助かっ?  
いや...まずい!



てめーで最後か?

とーん



俺の彼氏としての  
威厳が危険なんで

てめえ

いえ...ここで  
助けられると

このままじゃ  
おしまい!!



チッ...  
腹でもあんのか?

彼氏としての威厳を  
失せさせる





2015 ■ Yowamushi-Pedal, Unofficial Fanbook,  
OHEYA-NO-I.N.T.R.O. PRESENTS,